

組織的調査研究活動推進事業調査（要約） （マングローブ干潟漁場の有効利用について）

調査研究活動チーム

友利昭之助・大城信弘・与那嶺盛次（八重山支場）

玉城正雄・新里勝也（八重山支庁）

川崎和男・照屋忠敬（水産振興課）

糸満盛健（漁政課）

調査研究活動の目的および方法

石垣島・西表島におけるマングローブ干潟漁場の有効利用について検討することを目的とする。方法として、既存資料、現地調査等により、その環境特性を抽出するとともに、聞き取り、既存資料等による漁業実態調査を行ない、有用水産生物について検討する。また天然稚幼魚のナーサリーとしての評価とノコギリガザミ種苗放流等による栽培漁業の展開の可能性を主検討事項とする。

調査研究活動の結果及びマングローブ域漁場の有効利用について

- 本調査の詳細は「昭和60年度組織的調査研究活動推進事業調査報告書」（沖水試資料No.94）で報告したので、ここでは要約を述べる。
- 本調査は当初昭和60年度、61年度の2年間で計画され、60年度は主に現況把握、61年度に有効利用の検討を行なう計画であったが都合により、本年単年でまとめ終了した。
- マングローブは熱帯を中心に亜熱帯の汽水性の含塩湿地に分布、八重山群島では、石垣島では、名蔵川、宮良川、吹通川等。西表島では仲間川、浦内川、クイラ川、その他河川の河口域に発達する。
- マングローブ干潟は波静かな砂泥質海岸の平均潮位線付近から最高高潮線に至る潮干帯上部の堆積環境にある沿岸域に発達し、平均潮位より高位の潮干帯上部に著しく平坦地が発達する特徴がある。
- マングローブ域は植物は海草、海草数共に乏しく、コアマモ、マツバラミジグサ、コケモドキの一種、アヤギヌの一種、ヒトエグサ等が見られる程度であるが、いわゆるマングローブ植性の植物群は大量に生育し、これらが数百種に上る動物群を支えている。
- マングローブ域の水産動物は数百種に上るがその中で、水産上の有用種はノコギリガザミ、タイワンガザミ、ミナミクロダイ、ナンヨウチヌ、ギンガメアジ等で種類、量共に限られている。
- ノコギリガザミは西表島では年間4トン程度の漁獲と推定され、最も重要な魚種となっており、石垣島の名蔵地帯では、昭和57年度より続けて人工種苗の放流が試みられている。しかしまだ人工種苗生産の技術も安定せず、放流効果についても今後に残された課題である。

- マングローブ域漁場の有効利用について、漁場の赤土汚染も見られるが、食物連鎖等でマングローブが重要な役割を果たしており、現在の漁場環境を保全し利用するのが得策と考えられ、早急な保全対策が必要である。
- 漁業資源を増大させる方法として、当面ノコギリガザミの人工種苗放流等、栽培漁業の展開が最も有効と考えられるが、その際にはゴマアイゴ、ナンヨウチヌ等、他の魚種を含めて複合的に行なうのがより有効と考えられる。
- その為にはこれらの種苗生産技術、中間育成技術、放流技術、あるいは資源生態の解明等今後解明すべき問題点も数多い。また種苗放流後の漁場管理、資源管理等が重要な課題となり、漁業者および地域住民も一体となった栽培漁業の推進体制づくりに、早急に着手することが肝要である。